

第3回環境教育・環境学習ネットワーク会議 議事録

日 時：平成22年5月20日（木） 15:00～17:00

場 所：3号館301会議室

出席委員：高橋会長、鈴木副会長、飯島委員、稲委員、内船委員、斉藤（等）委員、
斉藤（允）委員、橘委員、奈良谷委員、野崎委員、原口委員（11名）

事務局：環境部自然・環境政策課（松尾課長、加藤主査、池田主任、川村主任）

傍聴：1名

◆ 会議の流れ

1 開会

2 委員の交代について

3 議題

(1) 環境教育・環境学習ネットワーク会議の方向性について

(2) こども環境フォーラムについて

4 その他

※人事異動等により、15名中5名の委員が変更となったため、会議の冒頭に自己紹介を行い、会議の傍聴、議事録の公開等の確認を行った。また、議事の冒頭で、これまでの開催経緯を事務局が説明した。

◆ 会議の要旨

(1) 環境教育・環境学習ネットワーク会議の方向性について

● 自然・環境政策課から趣旨説明

- ・会議の設置目的、役割の再確認
- ・会議の役割③に掲げた「具体的事業の検討」として「シンボル事業」を実施する。

※「シンボル事業」の定義

「その事業を推進することで他の事業をけん引し、環境教育・環境学習の発展に寄与するもの、あるいは、象徴的に環境教育・環境学習の連携例を示すもの」

- ・「シンボル事業」の実施の前段階として、事業の試行を目的とした「トライアル事業」を実施する（トライアル事業2案を提示）。

・議論のポイント

①ネットワーク会議の方向性の確認

- ②シンボル事業、トライアル事業実施の可否
- ③②で可となった場合には、具体的な実施内容の検討
- ④その他喫緊にこの会議で検討することの提案

【意見交換内容】

(会長) この会議の役割について確認したい。今、事務局から「この会議で事業を実施する」という説明があったが、「会議の役割」としては「アドバイス、検討」が主ではないのか。

(川村) 確かに会議のそもそもの役割は「検討」である。それは会議という実態を考えたときに、検討・立案が主で、実施団体としては動きにくいと考えてのことだ。しかし、このネットワーク会議の委員は、学校・事業者・市民団体とさまざま主体から参加しているため、事業を主催する団体はいずれかの委員の母団体であるので、共催という形ならばネットワーク会議も実施者としてかかわっていけないのではないかと考え、「具体的な目標」として事業の実施を掲げた。

(会長) トライアル事業も含めて、事務局案について検討したい。

(野崎委員) 「シンボル事業」と「トライアル事業」の違いは何か？まったく別のものと考えていいのか。

(川村) 環境教育・環境学習施策を牽引することができる事業をシンボル事業とするならば、その事業自体の規模は関係ないが、「シンボル事業」という名称には「大きい事業」というイメージがある。そこで、会議の目標として「シンボル事業」を高い位置において、そこに向かうための足がかりとして、いくつかの小さい事業を「トライアル事業」として位置付けた。そうした意味では、「トライアル事業」は「プレシンボル事業」と言い換えてもよい。

(課長) 今、市の総合計画の策定と並行して、平成 23 年度から 3 年間の実施計画の策定作業も行っている。環境教育・環境学習については「シンボル事業」を実施計画に位置付けたいと考えており、その事業をネットワーク会議で構築・実施することができればと思っている。その「シンボル事業」の構築を前提として、来年度できるものとして考えた事業が「トライアル事業」で、比較的容易に実現できそうな 2 案を提案した。この事業の実施で、ネットワークの広がりや情報の一元化などが生まれ、それをベースとして「シンボル事業」が生まれると思う。平成 23 年度に実施する事業があれば、市で予算を組みたいと考えているので、それも含めて検討してほしい。

(鈴木委員) 「トライアル事業 1」の内容で「事業を体系化し、見直しや模索を行う」とあるが、どんなイメージなのか詳しく説明してほしい。

(川村) 例えば、自然環境の学習を目的として、対象もレベルも同じ講座を、市と市民団体と事業者が実施していたら、それを見直し、それぞれレベルの異なる講座を実施すればステップアップに繋がる一連の講座ができる。

また、全部事業を並べてみたときに「水環境は充実しているが、大気環境は少ない」など並べてみて始めて見えるものがあるのではないかと考えた。この会議でそうした偏りや不足した部分、改善点を見つけることができればという提案である。

(鈴木委員) この事業案を実施する上で、一番大切なのは情報の収集であると思う。集まった情報が不十分では、見直しも中途半端になる。例えば、集計結果を見て「大気環境」が何もなくても、それは情報が集まらなかっただけで、実際にはたくさんの事業があるかもしれない。全ての事業者やイベント開催者からの情報収集は難しいと思う。

事業の実施には、目標達成を最初に据えるのか、一つずつ段階を踏んでいくのかの二通りだと思う。体系化という高い目標を掲げても何とかなるのかも知れないが、疑問もある。

(課長) 体系化の切り口はいろいろあると思う。例えばイベントならば、テーマ、場所、季節で事業を整理して情報発信すれば、参加者も、住んでいる地域や年齢、興味がある対象などから選ぶことができ、使いやすくなる。また、次は「これに取り組んでみよう」ということもできやすくなると思う。

(鈴木委員) 「トライアル事業1」は「トライアル事業2」も包括した形で、「シンボル事業」になりうるのではないか。

(課長) 「シンボル事業」とする事業は何でもよく、さまざまな可能性があると思う。例えば、「トライアル事業1」の案で、今は情報発信の場は市のホームページを考えているが、もし、この会議で何か収益を得られる方法を考え、その資金でサーバを購入しホームページを立ち上げることができれば、誰でも情報発信・情報収集ができる一步進んだ事業となる。そうすると、その事業は「シンボル事業」になると思う。

(鈴木委員) 事業ができあがったときに、我々委員がどのように関わっていくかということも肝心だと思う。

(課長) イベントだけでなく、企業や団体が「自分のところではこんなこともできる」という情報や、逆に市民からの情報を受けるなどの使い道も考えられると思う。ただ、そうした活用の前に情報収集は課題と考えている。情報が集まれば、まず提供するだけでもよく、それを月ごと特集にして配信するなど工夫もできる。いろいろな意見を頂きたい。

(会長) 事務局から説明があったが、委員のそれぞれの所属分野の立場で意見を出してほしい。2つの事業のうち、どちらかでも実施して、新たな問題点などを見つけることができれば、「シンボル事業」につながるということだと思う。

(野崎委員) 情報については日ごろから必要だと思っている。市民団体にイベント等を企画したときに、その活動に賛同してくれる企業などがあるのかも知れないが、その情報を探すことができない。そうした情報が一番ほしい。情報が得られれば、非常に活動も心強いし、互いに利があると思う。

(会長) 情報が体系化されたとき利用する立場として、学校の意見はどうか。

(橘委員) 学校がある地域の企業や市民団体と連携をし、学べたらいいと思っている。先の説明では情報をテーマごとに分けるという話があったが、地域ごとの情報があればありがたい。

(会長) 地域ということではコミュニティセンターはどうか？

(斉藤等委員) コミュニティセンターでは、テーマは全市的なものと地域特有のもの両方を考える。地域で活動している団体等の情報があれば事業がやりやすい。また、地域の小学校と連携をとって何かをやることも検討しているので、情報はほしい。今年度は地域の企業と連携した講座ができた。情報があれば、こうした取り組みは広がると思う。

(鈴木委員) 自分の会社では、地球温暖化教育を小学校と連携して行っているが、他の企業の状況はよくわからない。市内で同様な取り組みが行われている可能性があるので、一本化するなど整理の必要があると思う。

(会長) 博物館でも環境学習を実施していると思うが、現状はどうか？

(内船委員) 博物館では、毎年、同様な内容の講座を実施していることと、リピーターの受講者がいることで、いかに次のステップに繋げるかに苦慮している。初めての参加者と、2・3回受講している参加者の両方をどうやってステップアップさせていくかが課題となっている。そうした部分を市全体で「環境学習」というキーワードで繋げることができればとてもいいと思う。

あと、この議論の根本についてだが、このネットワーク会議の開催スケジュールの中で、事業を進めていくのに不安を感じるのだが、どう考えているのか。

(会長) 確かに意見交換ならば、今の開催頻度で十分だが、事業の実施となると時間は足りない。その辺は事務局でどう考えているのか？

(川村) 開催回数を多くしても、会議で事業全ての事務を負担するのは無理があるので、会議と事務局で役割分担をしていくことになると思う。また、もう一つの考え方としては、必要に応じて分科会を作ることなどもあると思う。

(会長) 会議として「これは市が行うべき事業」という提案をした場合はどうか？

(課長) 市で事業を実施することは可能だ。もし、会議がなければ、市単独で必要な事業を考え実施することになる。しかし、せっかく会議があるので、委員それぞれの立場で、意見・

アイデアを出し、それを役割分担して実施することができれば一番いいと思う。その中で行政が担うべきところは、率先して実行していきたい。

(会長) まさに、それが今日の議題となっている「会議の方向性の確認」の部分になると思う。

単にアドバイスだけでなく、もう少し主体を持った会議として動く。ただし、会議で全ての実務は担えないので、その部分は市が環境行政として推進する。方向性については、こうした定義となると思う。

(原口委員) 話を「トライアル事業1」に戻すと、学校は地域の情報を欲しているが、現状として、教員は忙しさの中でネットワークを張る余裕がない。情報がきちんと体系化されたホームページができたとしても、それを教員が利用するかどうかは疑問である。情報の発信だけでなく、啓発をしていく必要もあると思う。

「トライアル事業2」は教員に対する啓発事業だが、教員は比較的時間がとれる夏休みが研修期間となっている。そうした意味ではこの事業は実施する効果が高いと思うし、この連携がうまくいけば今後の環境学習につながっていくと思う。

実は、今年の夏休みに「総合的な学習研究会」でフィールドワーク的な学習会を検討している。これにネットワーク会議が協力してもらえれば、今年中に「トライアル事業2」が実施できると思う。先ほど会長から、「方向性としてはアドバイスという形だけではない」という話もあったが、この会議が中心となって何かすることは意義があることだと思う。

(会長) 今、原口委員にもまとめていただいたが、この委員の方向性としては、「アドバイス・情報交換だけでなく、事業等に主体的にかかわっていく」ということでよいか。

※ 委員から賛意

(会長) では、会議の方向性としてはこれで決定としたい。

次に「トライアル事業2」について原口委員からの提案もあったが、これについてはどうか。「総合的な学習研究会」の事業について、もう少し具体的な話を聞きたい。

(橘委員) 小学校の「総合的な学習研究会」主催の勉強会は昨年度から夏期休暇中に実施している。総合的な学習にはさまざまテーマがあるが、今年は環境学習をテーマにしたいと考えている。具体的には、8月上旬に市の「環境学習プログラム」を活用したものを考えている。ただ、学校のカリキュラムを市民団体等が学ぶところまでは考えていなかった。

(会長) 8月には野崎委員が「湘南国際村」でサマースクールを計画している。人材育成として関係するところもあるので、そちらの説明をお願いしたい。

(野崎委員) この会議の「平成22年度の検討課題(資料1)」である「環境教育・環境学習の場について」と関連する事業だが、里地・里山の保全・再生する過程そのものを環境学習とすることを目的に、試験的に「湘南国際村めぐりの森」で地域の小学校などと連携しな

がら事業を進めている。その企画の一つとして、今年の夏に、複数の講座や観察会などを盛り込んだ「サマースクール」を開催する。そのプログラムの中には、すでに活動を行っている人だけでなく、これから活動をしたい人や学校の先生方、行政の方にも役立つ講座があるので、ぜひ参加してほしい。

(会長) 人材育成ということで、サマースクールを勉強会に活用できるのではないかな。

(川村) 総合的な学習研究会の勉強会は8月に実施することは決定しているのか？

(橘委員) 正式な決定ではないが、研究会の中でその方向で動いている。

(会長) その研究会は、教育研究所とはどのように関わっているのか。

(原口委員) 研究会は、研究所とは別の自主的な組織である。

(会長) 以前、研究所に依頼され講師をしたことがあるが、数名しか参加がなかった。

(橘委員) 研究会の会員20名ほどいるので、勉強会の参加者もそれぐらいを想定している。

(会長) この会議で事業を具体的に計画することは難しいが、事業の必要性については検討したい。他の意見はあるか。

(稲委員) 最近の若手教員は、市外出身者が増えている。横須賀の環境や地域の情報を、学校の中だけで伝え合うことは限界がある。こうした場や講座をリンクさせ、教員が一緒になって学び、情報を共有していくことで、子どもたちにも還元できると思う。「トライアル事業2」はぜひ実施したい。

(会長) 時間が少なくなったので、議題の確認をしたい。「トライアル事業」「シンボル事業」実施の可否については、「やる必要はない」という意見はないと思う。

問題は、この事業をどう実施していくか、会議としてどうかかわっていくかで、それは今後検討が必要だと思う。

(課長) 次回会議は8月を予定しているため、研究会の話をそこで決めるのでは間に合わない。事務局で研究会と打合せ、具体的な内容・スケジュールを詰めたい。その経過を適宜メール等でご連絡させていただき、次の会議で結果をご報告させていただくことにしたい。また、トライアル事業1についても、情報収集・発信の具体案を事務局で作成し、次回会議でお示ししたい。それで、どうか？

(会長) 議題1はそれで決定としたい。

(2) こども環境フォーラムについて

● 自然・環境政策課から趣旨説明

- ・ こども環境フォーラムの現状説明
- ・ 課題（集客数、発表団体の応募数の伸び悩み）説明
- ・ 改善ポイント（事務局案）
 - ① イベント形態の見直し
 - ② 開催方法の見直し
 - ③ その他（開催時期、宣伝方法、イベント自体の必要性の検討）

【意見交換内容】

(会長) 集客数が多いことが必ずしも良いことではないが、過去の来場者数は多くない。また、発表団体の応募が少ないことは問題ではないかと思う。その辺を踏まえて、今後どうしたらよいかについて自由な意見をだしてほしい。

(飯島委員) イベントについての基本事項を確認したい。「子ども」に定義があるのかと、発表する内容としてはどんな活動の取り組みが多いのか。

(川村) このイベントの「子ども」についての明確な定義はないが、環境省の「こどもエコクラブ」は3才から18才までが対象なので、広い定義ではこの範囲を「子ども」と捉えている。ただし、これは発表者の定義であって、来場者に年齢制限はなく一般が対象である。発表内容については、去年は自然環境が2件、地域の美化清掃が1件。一昨年は、ホテル、ビオトープなど自然・生物関係が3件だった。

(会長) 「こどもエコクラブ全国フェスティバル」の開催は平成19年度だったか？

(川村) 平成18年度である。この全国フェスティバルを誘致したため、翌年度から記念イベント的に「こども環境フォーラム」を開始した。

(鈴木委員) 昨年度から「横須賀ECO大賞」がはじまったが、それとこのイベントとの関わりはどうなっているのか。

(川村) どちらも、環境保全活動、環境教育の推進という共通の目的がある。また、「横須賀ECO大賞」は「小・中学校部門」を設けて、子どもたちの活動を重視しているため、昨年度表彰式を「こども環境フォーラム」で行った。さらに、これにより双方に関心を持ってもらうという相乗効果を期待した。

(会長) 横須賀市は以前「環境フェア」を行っていたが、今はそうしたイベントがないため、表彰する場として「こども環境フォーラム」を選んだのだと思う。ただ、「横須賀ECO大賞」は表彰式のみなので、この「こども環境フォーラム」の課題とは切り離してもいい

と思う。

(鈴木委員) 毎年、どのくらいの発表団体の応募があるのか？

(川村) 毎年3団体に発表してもらい、応募もほぼ同じくらいである。

(原口委員) 昨年「こども環境フォーラム」に参加した。子どもたちの立場から話をすると、発表の場は必要である。自分たちが学習してきたものをたくさんの人に聞いてもらうところは他にないため、価値は大きい。発表した子どもたちは卒業しても、その足跡が学校には残り、それが引き継いでいける。

参加者が発表者の関係者に限られ集客数が伸びないことが改善ポイントしてあるが、もし他のイベントと共催となると「こども環境フォーラム」の重要性が薄れると思う。単独開催の方が、価値が高い。あとは情報発信とそれを根付かせていくかが課題だと思う。

毎年、各学校や研究会に「こども環境フォーラム」の案内が配付されるが、はたして何人の教員が知っているかと言うと少ない。情報がどうすれば定着するのが難しく、そこは課題なのだと思う。

(会長) 横浜市は子どもたちの環境活動発表の場が過去にあった。30校位が参加するので、会場はいっぱいになるが、自分の子どもたちの発表が終わると関係者は帰ってしまう。

「こども環境フォーラム」は発表団体が3団体しかないため、それが、来場者数が少ない原因でもあると思うが、パフォーマンス等がなくなると一般の客も減る可能性がある。

各学校で総合学習を含めて、何かしかの環境学習をしていると思うので、その発表の場としてフォーラムを活用すれば、違った展開となり集客が増えるかも知れない。

(課長) 市では、平成18年度までの10年間、6月に「環境フェア」を実施して環境啓発を行っていたが、市民の環境意識も変わってきたので、次はターゲットを絞って啓発を行うことで見直しをし、子どもを対象とした。

「こども環境フォーラム」開催のねらいは、ひとつにはそれまで横須賀市にはなかった子どもたちの発表の場とすること、もうひとつはアトラクションで集客をし、一般市民に子どもたちの活動を広く知ってもらうことだ。

3年間実施したが、発表の関係者の参加に偏り集客がのびない。今年は見直しをして集客を増やしたい。報告会やシンポジウム形式などいろいろやり方はあると思う。何かアイデアがあればいただきたい。

また、横須賀ECO大賞は今年も実施するので、ご協力をお願いしたい。

(会長) 逗子市では中学生のディベート大会を開催していた。中学生くらいになると、そうしたこともできる。

(内船委員) イベントの目的として、子どもたちの発表を聞いて大人が啓発を受けることはあ

と思うが、環境に関わる市民同士が繋がるきっかけにもできると思う。連携という部分ではトライアル事業1にも関連するが、インターネットとは別に、顔が見える場所で繋がりが広がっていけばいいと思う。

博物館で開催する講演会は、テーマとなる話を核にして、集まったさまざまな人たちの情報共有やネットワークづくりに繋げるきっかけとすることを目的としている。先日開催したホテルをテーマにした講演会では、講演会内での議論・発言は少なかったが、終了後の会場内では参加者同士の情報交換する姿が多く見られ、新たな関係が生まれていた。

そうした場で、活動する場所を見つけたり、疑問や悩みを共有して発展したりできると思う。こども環境フォーラムでも同様につながりのきっかけとできるのではないかな。

(会長) この環境フォーラムの在り方については、思いつくことがあれば、事務局に連絡してほしい。

○まとめ

(会長) 本日の議題については、事務局提案のとおり進めていくことでいいかと思う。具体的な内容はここでは時間がなかったが、あれば事務局に連絡してほしい。

他にここで討議したい議題、あるいは全体をとおして確認事項等があるか？

(内船委員) 「トライアル事業1」で、情報収集という話があったが、それも含めて、その情報集約や発信などはどこで行うのか。

(課長) 基本的には市のホームページ「よこすかの環境教育・環境学習」を考えている。

(会長) そうしたホームページがあるということをしてPRすることが大事だと思う。

我々で全ての情報を集めることは難しいので、ホームページを見て情報が集まってくるような仕組みが必要だ。

(鈴木委員) 市では行政の情報は当然把握していると思う。収集が難しいのは、一般の企業や環境の任意の組織や個人の情報だと思う。

(課長) システムの使い方や他都市の状況を調査し、効果的な方法を事務局で考えたい。次の会議では素案をお示ししたい。

(鈴木委員) 環境学習は、自然環境の保全と地球温暖化の二つが大きな柱だと思う。温暖化の環境教育をどのように進めていくかも我々が議論すべきではないか。

(課長) 市も温暖化問題に取り組んでいる。地域協議会があるので、そちらと役割分担しながら進めたい。全ての分野で環境教育は関わってくるので、総合的・体系的にどう進めるか精査していきたい。それには、各主体の連携が重要なので、この会議の場で意見をいただきながら進めたい。

(奈良谷委員)「トライアル事業2」を実施することで、学校と地域、市民団体等との架け橋になると思うので期待したい。

(齊藤允委員)「トライアル事業2」で教員の人材育成をするということに関連して、以前学校で野菜栽培の手伝いをしたときに、教員の知識の少なさに驚いたことがある。子どもたちが環境の学習をするためにも、環境全体について教員が学習する機会が必要である。

(会長) 本日はこれで終了とする。

【事務連絡等】 第4回は8月に開催する。日程調整を後日行う。